

東大/国立選抜クラスサンプル問題

# 国語

時間50分・100点満点

## 受験上の注意

1. 解答用紙には，受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は，解答用紙の所定のところに記入すること。  
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに，解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

岩次郎は、幼少の頃にその絵の才能を見抜いた蕪村の口利きで、画家への道を歩み始める。主水と名乗り、雇われの画家として活躍していたが、再会した蕪村の後押しで、かねてからの願いであった独立を果たす。あれこれと面倒を見てくれた蕪村に対して敬愛の念を抱いている。圓山應舉という大画家になった主水が、久しぶりに蕪村を訪ねてきた。

「……先生は私の批判もお聞きなのですわ」

「ああ、秋成のことやな。あいつ岩次郎さんと同い年くらいやし、岩次郎さんが絵一筋に極めようとしてはるから、嫉妬しとるんですわ。あいつはちっと飽きっぽいところがあるから、あっちこっち手を出してはポイ、や。そんな自分を棚に上げて人のことはまあ、よう言うわ。気にせんととき」

A 蕪村は笑いながら言った。蕪村の門人である几董の父、几圭の教えを受けた上田秋成の主水批判は蕪村の耳にも入っていた。ただ絵をそっくりに写すだけなら本物を見たほうがマシだ、蕭白という奇抜な絵を描く者も、主水の絵は図だ、というようなことを言っていたとかの噂だ。

「そうですね」主水は苦笑しながら言った。

「わしも言われるで。品がないとか、ヘタやとか。どうせ気に入った人しか買わんのやし、買わんやつはほっとけ、ちちゅう話や。なあ」①二人は顔を見合わせて笑った。

「わしは岩次郎さんの絵を見てると、厳しさや真摯な態度が（甲）伝わってきます。見ているこっちの背筋がしゃんと伸びる気がしますわ」主水は黙って聞いていた。

「それに②岩次郎さんの気持ちも分かるんです。岩次郎さんが生まれたのは、あのイナゴで大変だった頃ですやろ。わしもあれがきっかけで江戸に出たようなもんやし。あのときはえらいたいへんやったわ……。岩次郎さんも小さい頃は大変やったんやろ？」

「……はい」

主水の実家はB丹波の国、桑田の穴太村で、郷士ではあるが代々農業を家業としていた家の次男坊として生まれた。母は士族であり、三歳の頃こそ次男主水の生きる術として絵の才能を喜んでくれたが、イナゴの被害の上に折しも八代將軍の経済立て直しの時期とも重なり、a年貢の取立てが今まで以上に厳しい時期だった。

「家は百姓で、その時期風雅を育てる余裕もなく、ことに長兄はその程度で何になる、ちつとも本物とは似ていないし紙の無駄だ、と馬鹿にするのでよく喧嘩になりました。それが悔しくて、幼いながらも密かによく写すことにbシユウレンを重ねておりました」

そして家計の苦しさから、八、九歳の頃より次男である主水は寺に小僧として奉公に出された。そのとき、美しい襖絵や仏画などを目の当たりにした。

「そして幼い頃から寺に奉公に出され……その際に仏画を見た私は、これを描いた人は仏を見たのか、と和尚に問いました」

「ほう、して和尚は何と？」

「仏画は心に仏が見えて初めて描けるもの、と。その仏が見えるためには仏が心に留まるように、日々行いをしなければならぬ」と

「はは、厳しいな」

「はい。さすがに今は全ての画家がそういう思いで画業をしているとは思いませんが、③私の画業の基本はその思いです」

蕪村は主水その言葉を聞いて少し考え込み、言った。

「……なるほど。岩次郎さんは、真の姿を描こうとしているのやな」主水はうれしそうに、微笑んだ。

「そうかもしれません。実際見たことはない龍や動物も、まずより近いと思われるものを描き、自分の中で確かなものとして捕らえることができたら描いております」

「ふむ、おもしろいな。どの画家も今までにはない奇抜なものを描き、人々を驚かすことこそが画家の個性だとか本分だと思つとるのにね岩次郎さんは逆なんやな。目の前にはない、見えないものをあたかも見ている如くに描き出す、か。④単なる写生ではないんやな」

その言葉に、主水は自分を理解してくれる蕪村の存在をこれほどありがたい、と思ったことはなかった。

「それで少しも無駄なことはせんとこう、というc性分になるのは仕方のないことやとは思うわ。それはそれで、とても美しいことや。しかし、⑤も少しいろんな絵を描いてみるのもいい経験やな」

そう言って蕪村が立ち上がって、dエンガワを離れようとすると猫が心細げにやあ、と鳴き、蕪村の後をついてきた。

「お、なんや、可愛い奴やな。わしどこも行かんぞ」顔をほころばせて猫を撫でるその様子を見て、主水は尋ねた。

「その猫はこのままお飼いになるのですか」

「ん？ いたいならいてもええし、どこか行って遊びに来たら飯くらい食わせるし。でも猫は十年の約束をしとかんと、やっぱり化けるやろか」

「化けないでしょう」主水はあっさり言った。

「ふふ、そういうときの岩次郎さんは頼もしいわあ」そう言いながら、蕪村は絵を描く道具を持ってきた。  
「さてさて、わしは酔ってるし益々拙い絵になるけどな……」

そう言いながら紙にさらさらと、蕪村が実に楽しそうに、鼻歌混じりで描きだした。猫もその様子を見守る中、蕪村はしやくしが着物を着て踊っている姿を紙の端へ描いた。

「ふふん、猫もしやくしも、や。さ、岩次郎さんは化け猫が踊っているところを描いてもらえんか」と言って紙を渡した。  
「え、……あの」⑥主水は少し戸惑った。

「ほら、こんな感じや」

そう言って、蕪村は猫を引き寄せ、その両足を背後からつかみ、後足だけで立たせてひよいひよい、と踊るように前足を動かした。猫は嫌がってまた逃げて行った。主水は筆を握ったまま、その蕪村の様子と、かつて見た化け猫の絵を思い出していた。あの猫が踊りだしたらどんな感じだろう、きつと楽しげに……。そんなことを思いながら、いつもの観察による緻密な頭を働かせての絵ではなく、子供を喜ばせたい一心の勢いで描くような気持ちで描いてみた。蕪村のように鼻歌混じりとまではいかなかったが、描いてるうちに、なんだか楽しい気分になってきた。幼い頃はこんな気持ちで絵を描いていたような気がした。

「……どうでしょうか」

蕪村は主水の描いた化け猫が踊ってる絵を見て、うれしそうに言った。

「おうおう、よう描けとる。わしが昔描いた化け猫よりなんぼもええわ」そう言うと、蕪村は主水の描いた猫の絵の上に、

『ぢいもばもねこもしやくしもおどりかな』と書き、隅へ、

『猫は應擧子が戯墨也　しやくしは蕪村が酔画也』と賛を書いた。そしてそれを眺めて、満足そうに言った。

「ふふ、応擧と蕪村の合作や。自慢しよ。これ、もろてもええやろか」

「どうぞ。私もこんなに楽しく書いたのは久しぶりでした」

雅号または諱を應擧いひみなという圓山應擧まるやまのうりたかこと主水も、うれしそうに笑いながら言った。

「そうか、よかったわ。気晴らしになるようやったら、また遊びにきてくれたらうれしいわ」

「はい、ぜひ」

そう言って、二人で酒を酌み交わしていると、eヶイコをしているのか、遠くのほうから小さく踊りのお囃子はやしが聞こえてきた。⑦明るい月の光の下で、酒を飲むほどに主水も踊り出したくなる自分に驚き、これなら猫だって踊るかもしれない、と思っていた。

（折口真喜子『踊る猫』より・出題の都合上改編・省略した箇所がある）

語注

- ・ 門人：門下の人・門弟・門下生。つまりは、弟子のこと。
- ・ 上田秋成：江戸時代後期の読本作家。歌人・茶人・国学者・俳人としても活躍。怪異小説『雨月物語』が代表作。
- ・ 郷士：農村に土着した武士。また、土着の農民で武士の待遇を受けていた者。
- ・ 士族：武士の家柄。明治維新以後は、武士階級の出の者に与えられた名称。
- ・ イナゴの被害：トノサマバッタなど相変異を起こす一部のバッタ類の大量発生による災害のこと。蝗害ともいう。
- ・ 八代将軍の経済立て直し：徳川吉宗が行った享保の改革のこと。
- ・ 風雅：高尚で、みやびな趣のあること。また、そのさま。詩文・書画・茶道などのたしなみのあること。
- ・ 雅号または諱：雅号は画家文筆家が本名の他につける風流な別名。諱は人の死後尊敬しておくる尊称。死んだ人の生前の名。
- ・ 圓山應擧：江戸時代中期から後期の絵師。近現代の画壇にまでその系統が続く「円山派」の祖であり、写生を重視した親しみやすい画風が特色。

〈設問〉

問一 線部A「蕪村」とあるが、江戸時代中期に活躍した。松尾芭蕉・小林一茶と並び称される俳人でもある。この人物の名字を二字で答えよ。ただし、漢字でも平仮名でもよいものとする。

問二 線部B「丹波の国」とあるが、現在の都道府県名では、どこにあたるか。漢字で答えよ。

問三 ( ) 空欄甲には、この場面に適した「強く身や心に感ずるさま」を表す副詞が入る。もつともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えよ。

ア じんじん　イ ひしひし　ウ きんきん　エ つくづく　オ びしびし

問四 線部a～eのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを平仮名で書け。(ただし、楷書で丁寧に書くこと。)

問五 —— 線部①「二人は顔を見合わせて笑った」とあるが、このときの二人の気持ちは、どのようなものと考えられるか。その気持ちを二十五字以内で簡潔に説明せよ。

問六 —— 線部②「岩次郎さんの気持ち」とあるが、このときの岩次郎（主水）の気持ちはどのようなものと考えられるか。もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 大好きな母親に絵の才能を認められてうれしくて仕方のない気持ち。
- イ 一生懸命描いた絵を馬鹿にした兄を何とか見返してやりたい気持ち。
- ウ 家を継げない次男として家計を助け生きる術を身につけたい気持ち。
- エ 和尚の厳しい教えを守り日々精進して仏の姿を見て描きたい気持ち。

問七 —— 線部③「私の画業の基本はその思いです」について、つぎのⅠ・Ⅱの間に答えよ。

- Ⅰ 「その思い」を端的に表す部分を文中から七字でさがし、書き抜いて答えよ。
- Ⅱ 「その思い」に従って絵を描いてきた結果、主水はどのような絵を描くようになったのか。その絵を端的に表す部分をこれよりあとの文中から十六字でさがし、書き抜いて答えよ。

問八 —— 線部④「単なる写生」とあるが、どんなものか。それを端的に表す部分をこれより前の文中から十三字でさがし、書き抜いて答えよ。

問九 —— 線部⑤「もう少しいろんな絵を描いてみるのもいい経験やな」とあるが、ここではどんな「経験」か。それを説明したつぎの文の空欄に入れるのにふさわしい部分をこのあとの文中から五字でさがし、書き抜いて答えよ。

主水が今まで忘れていた

で描く経験。

問十 —— 線部⑥「主水は少し戸惑った」とあるが、なぜか。主水が「戸惑った」理由として、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 化け猫の存在を信じていないのに、上手に描けるはずがないと考えたから。
- イ 酔っ払っている蕪村より上手に描いてしまっただけで失礼になると考えたから。
- ウ 自分の絵の描き方とはまったく違う描き方ができるか不安だと考えたから。
- エ こんな絵を描いてしまっただけで画家としてのキャリアが傷つくと考えたから。

問十一 —— 線部⑦「明るい月の光の下で、酒を飲むほどに主水も踊り出したくなる自分に驚き、これなら猫だって踊るかもしれない、と思っていた」とあるが、このときの主水の気持ちを四十五字以内で簡潔に説明せよ。

次の文章を読んであとの設問に答えよ。

どうして学校に行かなくやいけないの？ 多くの人が一度は考えたことのある疑問かも知れません。もちろん答えもいっぱいあります。勉強しに行ってるんだ！ という人もいれば、部活動がしたいからという人もいるでしょうし、友だちとおしゃべりしたいから行つてるとかね給食を食べに行つてるとか、あるいは内申点を良くして、推薦でいい学校に行きたいから、出席を増やすために戦略的に学校へ行っている、なんて人もいるかもしれません。何でもOKです。①学校に行かないと意外と暇だから、行っている、という消極的な考え方もあるかもしれませんし、ほかで間に合っているから学校に行く必要なんかない！ という考え方も否定しません。本当にどのように考えてもいいと思います。どんな考え方で、A人それぞれ置かれた状況が違いますから、間違っていることなど一つもありません。ただ、子どもにこの質問をされたりすると、おとなたちは非常に困ってしまうことがよくあります。②今や義務教育への就学率はほぼ100%ですし、高校も9割超え、過半数が四年制大学に行く時代です。それに加えて、子どもには「教育を受ける権利」があり、親には「教育を受けさせる義務」があると法律で決まっています。ですから、できれば当然、学校に行つてほしいと思うのはあたりまえの気持ちなのですが、「法律で決まっているから」なんて答えるのとちよつとB( )に欠けるので、一生懸命その理由を考えたりします。考えた結果、一番多く聞かれるのは、「将来のため」という答でしょう。学校はあくまで通過点にすぎないので、将来を見据えたときに、学校でのいろいろな経験が社会に出てから役に立つてくることがわかるよ、というわけです。このような学校の役割を、教育社会学という学問では、「学校の社会的機能」というように呼びます(荻谷剛彦「学校の社会的機能」天野郁夫ほか『教育社会学』放送大学教育振興会・1994年など)。確かに、③学校で経験することが、社会に出てから役に立つというのは非常にもしっかりと聞こえます。たとえば、僕の小学校では「学校にシャーペンを持ってきてはいけない」という校則がありました。低学年のうちにはね「書く」ということに慣れていませんからね筆圧をコントロールしやすい鉛筆が推奨されるのはわかります。しかしなぜか、高学年になつてもシャーペンは禁止され続け、でも中学校になると、なぜか解禁されるというよくわからない校則でした。高学年になれば、いいかげん、いいんじゃない？ と思つたものですが、先生いわく「社会のルールを守らせる練習」としてそうした校則が存在するのだということでした。いまいち納得がいきませんが、「じゃあしようがないか」という気持ちになります。また特に、「学校の社会的機能」を支えているのが、「メリトクラシー」という社会のあり方です。メリット(業績)＋クラシー(支配)。つまり、一生懸命学校で勉強すれば、いい高校に入れて、いい大学に入れて、いい就職ができて、さらには将来は一生安泰だという、業績がある人が高い地位について、社会を支配しているというあり方です。つまり、将来役に立つだろう能力を身につけて、業績を積み場が、学校だというわけです。④ほら、「一生懸命学校で勉強しなきゃ」って気持ちになつてきたでしょ。ところが、最近、この考え方に異議が唱えられました。もしかすると、社会は勉強や成績などの業績を指標とするメリトクラシーに包まれていることに加えて、もつといろいろな、⑤情動的な性質の強い能力でも支配されてきているのではないか、という意見です。そして、じつは社会では、そっちの能力のほうが重要視されつつあるのではないかと。たとえば、「人間力」や「考える力」、「問題解決能力」、「対人関係能力」、「生きる力」、「母親力」、「女子力」なんていうものもあります。挙げるとキリがありませんが、『〇〇力』という本がよく出版されていることから、単なる学力以外のもつといろいろな能力が、社会の中で重要視されてきていることがうかがえます。このような、「メリトクラシー」が新たな段階に進み、さまざまな「〇〇力」が重視されるようになった社会を、「ハイパー・メリトクラシー」と呼びます(本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』N-T出版・2005年)。この用語の発明者である本田由紀さんは、⑥「ハイパー・メリトクラシー」のような能力が蔓延すると、学校でもそうした能力が重視され、子どもたちが、どの方向に努力したらよいかかわからなくなつてしまうのではないかと危惧しています。今や学校で、「コミュニケーション能力養成講座」なんてものが開かれることも少なくありません。先ほども述べたように、学校では、将来のために社会が求める「〇〇力」を身につけるようにしなければなりませんから、先生方も必死です。じつは、社会が求める能力というのは、彼らが学校生活を過ごすうえで、非常に重要なポイントになります。学校が将来への通過点にすぎないとすると、学校にいるうちに児童生徒に「〇〇力」を身につけさせなければならなくなるからです。たとえそれがC( )の知れない「〇〇力」であったとしてもです。学校で「〇〇力」に価値が置かれていることは、そこで過ごす彼らに、そうした能力の大事さを強く植えつける力を持ちます。たとえば、男の子と女の子が喧嘩したときに、先生が男の子ばかりを叱るとします。その様子を見て、児童は、男の子は女の子に手をあげてはいけないんだということを自然に学習します。これは先生が、意識的に何かを伝えるつもりではなかったけれど、児童の側が勝手にそうしたことを体得してしまった結果と見ることができます。これを、「学校の潜在的カリキュラム」と呼びますが、潜在的にしる、(甲)にしる、⑦学校はそこで過ごす児童生徒に、「正しさ」を刷り込ませるような特別な力を持っています。メリトクラシーからハイパー・メリトクラシーに移行しつつあると言われる現在、学校での正しさは、さまざまな方向へと膨張しつつあるのではないかといいことです。

(鈴木 翔『教室内カースト』より・出題の都合上改編した箇所がある)

語注

- ・情動：一時的で急激な感情を特に情動という。人間でいえば、喜び・悲しみ・怒り・恐怖などの激しい感情の動き。
- ・蔓延(まんえん)する：伸び広がること。はびこること。好ましくないことにいう。
- ・危惧(きぐ)：うまくいかないのではないかと、あやぶみ、おそれること。

問一 この文章を大きく二つに分けたとき、後半の最初の四文字を書き抜いて答えよ。

問二 〓 線部A「人それぞれ置かれた状況が違います」とあるが、同様に「さまざまに異なって同じではないこと」を表す漢数字を二つ用いた四字熟語を漢字で答えよ。

問三 〓 線部B「( )に欠ける」・C「( )の知れない」とあるが、それぞれの空欄に適語を漢字で入れて慣用表現を完成させよ。ただし、字数は解答欄の指定に従うこと。

問四 ( ) 欄甲には、「潜在的」の対義語が入る。漢字三字で答えよ。

問五 〓 線部①「学校に行かないと意外と暇だから、行っている、という消極的な考え方」とあるが、筆者は、なぜ「消極的」と考えているのか。その理由を二十五字以内で簡潔に説明せよ。

問六 〓 線部②「今や義務教育への就学率はほぼ100%」とあるが、「義務教育」であるにもかかわらず、なぜ「ほぼ」なのか。その理由の一例を挙げ、文中の十字の語句を用いて簡潔に説明せよ。

問七 〓 線部③「学校で経験することが、社会に出てから役に立つというのは非常にもっともらしく聞こえます」とあるが、「もっともらしく聞こえ」る学校側の言い分を文中の語句を用いて三十五以内で簡潔に説明せよ。

問八 〓 線部④「ほら、『一生懸命学校で勉強しなきゃ』って気持ちになってきたでしょ」とあるが、筆者は、なぜ読者がそういう気持ちになると考えたのか。その理由を三十五字以内で簡潔に説明せよ。

問九 〓 線部⑤「情動的な性質の強い能力」とあるが、この「能力」を簡潔に言いかえている部分を文中から十八字でさがし、書き抜いて答えよ。

問十 〓 線部⑥『「ハイパー・メリトクラシー」のような能力観が蔓延すると、学校でもそうした能力が重要視され、子どもたちが、どの方向に努力したらよいのかがわからなくなってしまうのではないかと危惧しています」とあるが、なぜ本田さんは「危惧」しているのか。その理由を述べたつぎの文の空欄に入れるのにふさわしい部分を文中から二十字以内でさがし、書き抜いて答えよ。

【

】してしまうから。

問十一 〓 線部⑦「学校はそこで過ごす児童生徒に、「正しさ」を刷り込ませるような特別な力を持っています」とあるが、それはどんな「力」か。それを説明したつぎの文の空欄に入れるのにふさわしい部分を文中から四十六字でさがし、初めと終わりの五字を書き抜いて答えよ。

【 学校が

】する力。

